

埼玉育ちのグローバル人

川口発国連行き珍道中

第 1 回「北京編」

天野 晟さん



「天野さんの長所は、転んでもただでは起きないところだよね！」

これは「埼玉発世界行き」奨学金の面接官をしていただき、のちに埼玉県国際交流協会で働くきっかけをくれた恩人の言葉です。その後何かに躓くたびに、そうだそうだ、ここで諦めてはいけないのだ、とよく思い出しては奮起して立ち上がっています。

自己紹介が遅れましたが、私は、現在スイスのジュネーブにある国際労働機関（ILO）という国連専門機関で同一価値労働同一賃金の促進やハラスメント防止に関する仕事をしている、天野晟と申します。協会で勤務していた頃から愛読していたこのリレーエッセイに寄稿することは光栄である反面、とても恐れ多いのですが、紆余曲折を経てようやく子供の頃からの夢（まだ一步目）を叶えた私のこれまでの珍道中をご紹介しますことで、国連で働くことを少しでも身近に感じていただけたら幸いです。

（1）国連を夢見る少女の誕生

私は、現在「外国人団地」として有名な埼玉県川口市にある芝園団地で育ちました。当時の芝園小学校でもまだ 1 学年に 3, 4 名ほど外国籍の生徒さんがいる頃、そこまでグローバルな環境というわけではありませんでした。ただ、たまに開催される国際理解の授業が大好きで、緒方貞子さん

の存在もあり、小学校の卒業文集には「国連で働いて困っている人を助けたい！」というようなことを書いていました。バックグラウンドの違う人たちと交流するのが好きだし、誰かの役に立ってカッコいいし・・・！みたいな、単純な動機だったと思います。のちにこの夢が、呪縛となって自分を苦しめるとも知らず・・・。

（2）「近くて遠い」隣国へ

国際的な仕事に就くべく大学に入学した私は、2 年次に留学先として中国・北京を選びました。当時「東アジア共同体」構想が盛んに議論されるようになった時期であり、欧米ではなくあえて中国の視点から学ぶ国際政治は面白そうだという理由でした。中国全土から集まった優秀な学生達と切磋琢磨し、何より彼らのバイタリティや「学んだことを自国に還元していかなければいけない」というマインドに刺激を強く受けました。自分が今いる環境は、けして自分の努力によるものだけではなく、周りから与えられた機会を大事にしなければいけない、ということを日本では特に考えずに漫然と過ごしていたように思います。

また、この留学期間が私にとって最初の、本当の意味での「多様性との遭遇」でした。過去は変えられないけれど、同じ時代を生きる人間として、これからの社会に何が必要で、自分たちに何ができるのか、中国の学生や他国からの留学生と共に何度も議論しました。「異なる」ということ

を柔軟に受け入れ、この先の未来を前向きに築いていくという行為、それが多様性を受け入れるということなのかなと感じた日々でした。

授業で政治的に際どい内容の質問を受け、その答えに窮したこと、外交戦略分析の授業でバイアスのかかった映像が流れ、驚いたこともありました。あくまで学問的にフラットな立場で議論は行われていましたが、その場で相手に伝わる言葉で意見を述べる力が足りなかった自分の不甲斐なさ、様々な社会的事象について疑問を抱くこともなかった自分の未熟さは、今でも印象に残っています。物事を良い・悪いの二項対立だけで捉えるのではなく、理由を考えていく過程が何よりも重要であることを学びました。

あの時の経験で得た、「異なる社会構造が異なる政治体制を形作る」「政策立案には歴史的な背景や社会通念への理解は欠かせない」という考えは、私の原点であり、現在の職場でも大切にしています。



日中学生手話交流事業の様子

(3) 20歳の自分に今伝えたいこと

10代の私は、根拠のない万能感に満ち、国際社会で活躍したいという漠然とした目標を掲げてふわふわしていました。今だからこそ感じるのは、①日常生活における小さな違和感や変化から目を背けず、その裏にある「何故」をきちんと自分の言葉で言語化していくこと、②足元にある価値を見つめなおし、自分の言葉で日本を表現していく

こと、の大切さです。

国際的な場で、自分が唯一の日本人として、日本について説明を求められる機会は沢山あります。幸運なことに、日本という国に興味を持ってくれる方はまだまだ多く（良い意味でも悪い意味でも）、グローバル社会で生きていく人間であるなら、正しく情報を伝えていく責務があると思っています。

（余談：今日たまたま職場のクリスマスパーティー兼クイズ大会があり、1997年に採択された京都議定書を答えられなかった私では、説得力に欠けるかもしれません。）



留学先で1年過ごした学友達と